みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

カキの文化史

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4833

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

カキの文化史

池谷和信
［国立民族学博物館教授］

カキは、日本の果樹のなかで人々とのかかわり方が密接なものの一つである。北海道を除く国内各地で、地元の人々によって多様な甘柿や渋柿がつくられてきた。そして、秋の味覚を代表するオレンジ色の果実はもちろんのこと、漁網や木製容器や衣類や和紙などを長もちさせるために柿渋が利用されてきた。今から20年前の調査によると、大阪南部の集落においてわずか1kmの範囲に、10種類の品種のカキが存在していたという。屋敷内には生食できる甘柿品種が植えられ、集落外には干柿にしたり渋をとって防腐用や防虫用に使う渋柿が見られたという。

20年前よりも都市化が進む現在、このような多様な樹木景観は日本中でさらに失われている。その一方で、世界にはカキの仲間が熱帯地域を中心に200種近くあるが、その多くは現在でも家具や建築材などに利用されている。なかでも黒檀は、アフリカ諸国の観光地では民芸品の素材として欠かせないものになっている。

K.Ikeya

黒檀（アフリカンエボニイ）から創られた民芸品としての人像。